

セスジアカムネグモの生態

大 熊 千 代 子

Some observations on the habits of *Oedothorax insecticeps*

Boesenberg et Strand (Araneae)

By Chiyoko OKUMA

1. 序言：セスジアカムネグモ *Oedothorax insecticeps* BOESENBERG et STRAND は 1906年、佐賀の標本に基づき、新種として記録された。以来、北海道（斉藤，1939；八木沼，1957），青森県（八木沼，1958），長野県（干国，1941），大阪府（八木沼，1938・小村，1952）等で記録されたが，その生態は殆んど明らかでなかつた。しかし，近年に到つて，水田のくもの調査が進むに従い，各地から発見され，水田に於けるその棲息密度のたかさによつて，他の数種のくもと共に特に注目されるようになった。筆者は1955—1956年，元佐賀県立農事試験場の於保信彦技師の教えによつて，はじめて水田に於けるセスジアカムネグモの状態を知り，その生態調査が極めて興味あるものである事を知られた。1957年夏，野外調査に合せて，飼育による観察を試みたので，今までにわかつたことを，一応まとめて報告する。

2. 棲息場所及び習性：棲息場所について，今迄に，セスジアカムネグモでは，落葉の下（小村，1952），水田（小林，1957，1958，外）等が記録されている。同属では，アンネンムネアカグモ (*O. anneni*) 及びスソクロムネアカグモ (*O. melanopygus*) が，石や石垣の上で採集されており（安念，1941），ヨツボシアカムネグモ (*O. quadrimaculatus*) 及びアトグロムネアカグモ (*O. femineus*) が山村地帯の樹間に棲息することが報じられている（干国，1941）。外国に於ける同属のものでは，私の知っている範囲では，“湿つた草むら”とされたのが2種 (*O. gibbosus*, *O. agrestis*) „草むら，下生え”が3種 (*O. fuscus*, *O. retusus*, *O. apicatus*) ある。（Locket and Millidge, 1953）。

福岡市近郊に於いてみられるセスジアカムネグモの主な棲息場所は次の通りである。

越冬期（11月—3月）平地の落葉，土塊，石の下。

活動期（4月—10月）水田，湿つた畑や草むら。

便宜上活動期とした4月から10月にかけて，上記の場所で，このくもの各世代をみる事が出来，その大部分は，地表近くに不規則網を造つて棲息する。即ち，キャベツのような広葉の植物に棲息するときは，地表を覆うようにしている下葉の裏に糸を数本張りめぐらして，直立した植物，例えば稲や麦，多くの雑草の根元に棲息するときは，不規則な糸をせいぜい 25 cm² 位に張りめぐらしてその下側を主な活動の場とする。しかし，この種のくもは，多くの造網性のくもと違つて，歩脚が発達しており，成雄が雌を求めて徘徊する他，成雌は産卵の為に或は，植物の表面に附着させた卵囊を見張るため

に、網をはなれて徘徊性を帯びる。

このくもの食性に関しては、水田に於いて、ツマグロヨコバイの幼虫及び成虫、ウンカ、トビムシ、フタテンヨコバイ、アブラムシ、ユスリカが捕食され、共食もあることがすでに報告されており（小林，1958），その捕虫の方法は、上記のように徘徊性を帯びたものが、静止している昆虫を襲うほか、網に落ちて来た昆虫を攻撃し、例えば、ツマグロヨコバイのように、くもの体の何倍もあるようなものも、巧みに糸をからませて翅や脚の自由をうばい、簡単に斃すといった二つの方法があるようである。

3. くもの捕食量：捕食量の管瓶内試験を試みた。1×6 cm の管瓶に、水を含ませた濾紙片を入れ、かるく綿栓したものを容器とし、野外で採集した10頭の成雌を1頭ずつ分封して、食餌昆虫には、ウンカ類を主として、ユスリカ、ヨコバイ類を混せて用い、給与虫数と、24時間に斃した虫数を毎日記録した（第一表）。この表から直ちに捕食虫

第 一 表

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
6月 21日	10 10	9 9	8 5	6 5	4 3	5 5	7 7	5 5	6 6	9 9
22日	5 5	5 5	3 3	4 4	6 * 4	5 5	3 3	5 5	5 5	5 5
23日	5 5	9 5	7 5	8 5	7 5	7 7	5 4	4 4	6 6	6 5
24日	4 4	6 4	6 5	4 4	7 4	7 5	4 * 2	5 3	5 * 5	5 0
25日	11 10	7 5	8 3	5 5	6 6	4 4	6 4	7 4	7 3	5 1
26日	6 3	5 3	7 7	4 2	6 6	5 4	5 5	4 * 5	4 0	4 2
27日	7 4	4 4	7 6	8 8	6 5	4 1	6 5	5 5	6 5	5 2
28日	5 5	5 * 5	7 7	5 5	5 5	3 * 3	5 * 4	5 5	5 5	5 5
29日	7 7	5 5	7 6	7 6	9 8	6 6	9 5	5 5	5 5	5 3
30日	4 * 4	11 8	6 6	6 * 6	6 4	10 9	9 9	5 5	6 * 5	3 0
合 計	64 57	66 53	66 53	57 50	62 50	56 49	55 48	50 45	55 45	52 31
平均捕食虫数	5.7	5.3	5.3	5.0	5.0	4.9	4.8	4.5	4.5	3.1

左列給与虫数 右列捕食虫数 *印産卵を表す

数を算出することは出来ない。全体の53%は与えられただけの食餌昆虫を完全に斃しており、多いものでは10頭に及んでいる（A，6月21日）。このことから給与虫数を更に増加した場合、捕食虫数も更に幾割か増加するものと思われ、この試験は全く不充分だつたと云える。しかし、10日間の累計では、給与虫数に対する捕食率が90%を越えていない事から、こゝでは一応3頭乃至5、6頭位を捕食するものと考えたい。

4. 産卵及び経過：前項でも述べたように、卵は棲息場所近くの植物の表面に、うすい膜に包まれて、平たく産みつけられる。野外で乱獲した27ヶの卵塊で卵数を調べたところ（第二表）、31から40ヶが最も多く、1卵塊中の平均卵数は36から37ヶ位であつた。

次に産卵回数を調べるために、野外で採集した雌雄を1組づゝ、

第 二 表

卵 の 数	卵 塊 数
20 以下	3
21—30	3
31—40	14
41—50	3
51—60	4
60 以上	0
992	27

第 三 表

採 集 日	6 月 20 日	6 月 20 日
第 1 回産卵	6 月 30 日	6 月 24 日
第 2 回産卵	7 月 9 日	7 月 1 日
第 8 回産卵	7 月 15 日	7 月 8 日
第 4 回産卵	7 月 19 日	7 月 12 日
第 5 回産卵	7 月 24 日	7 月 18 日
第 6 回産卵	7 月 31 日	7 月 25 日
第 7 回産卵	8 月 5 日	7 月 30 日
第 8 回産卵	8 月 12 日	8 月 5 日
第 9 回産卵	8 月 18 日	8 月 9 日
第 10 回産卵	8 月 24 日	8 月 16 日
第 11 回産卵	8 月 29 日	8 月 26 日
第 12 回産卵	9 月 3 日	
第 13 回産卵	9 月 11 日	
第 14 回産卵	9 月 17 日	
死 亡	10 月 3 日	8 月 28 日

第 四 表

	A	B	C	D	E
産 卵	6 月 24 日	"	"	6 月 26 日	"
出 産	7 月 2 日	"	"	"	"
第 1 回脱皮	7 月 8 日	7 月 8 日	7 月 8 日	7 月 10 日	7 月 13 日
第 2 回脱皮	7 月 16 日	7 月 16 日	7 月 13 日	7 月 18 日	7 月 19 日
第 3 回脱皮	7 月 22 日	7 月 19 日	7 月 20 日	7 月 25 日	7 月 30 日

湿気を保たせた管瓶内で、日に数頭当りの食餌昆虫を与えて飼育し、産卵状態を記録した。試供材料といたくもは未だ産卵していないと思われるものを選んだが、確信はもてない。それによると、産卵回数は非常に不揃いであったが、第三表に最も産卵回数が多かつたもの 2 例の産卵状態を示す。産卵回数 14 回のものを例にとると、約 500 卵強を産卵した事になる。

卵は、飼育観察を行つた 6 月から 9 月にかけては、例外なく 5 日目に孵化し、6、7 日目に出現した。6 月 24 日及び 6 月 26 日に産みつけられた 2 はらの出現後の経過を第四表に示す。飼育は、径 4cm の小型シャーレを用い、底に水を含ませた濾紙を敷き、水を充分に与え、食餌には、出現後約 10 日間（体長 1mm 足らず）は翅や脚を切つたユスリカを主として与え、第 1 回脱皮後からはウンカ類を与えた。性徴は、第 3 回脱皮後はじめて現れ、その後 2、3 日を経過して完全に成熟した。これらはすべて雄であつた。

これとは別に、成雌ぐも飼育中の径 8cm のシャーレ内で、仔ぐもが 1 頭育ち、経過は明らかでなかつたが、1 ヶ月後に産卵をはじめた。これらの事を総合すると、卵期は 5 日、幼期は約 1 ヶ月、産卵期間は 2、3 ヶ月で、野外においてすでに観察されているように（小林，1958；外）、少なくとも食餌の豊富な 4 月から 10 月にかけては、幾世代もが重なることがわかる。

この調査で明らかにされなかつた、越冬期の状態、繁殖期間、年間の消長、又は捕食量や食餌について、本年度は更に計画的な調査を試みたいと思つている。

最後に、色々御教示頂いた於保信彦、小林尚両技師、御校閲を頂いた安松京三教授に深謝の意を表する。

文 献

- 安念 嘉一, 1941, *Acta Arachnol.*, 6 : 108-111.
 干国安之輔, 1941, 日本アルプス山系の蜘蛛（長野）, 81-83.
 小林 尚, 1957, 殺虫剤散布による水田昆虫相の変動に関する特殊調査。1956 年度の成績（徳島県農業試験場）。
 1958, 同。1957 年度の成績。
 斉藤 三郎, 1939, *Saito Hō-on Kai Museum Res. Bull.*, 3 : 55.
 植村 利夫, 1937, *Acta Arachnol.*, 2 : 150-153.
 八木沼健夫, 1957, *Acta Arachnol.*, 14 : 54.
 1958, 資源科学研究所集報, 46-47 : 71.
 Boesenberg, W. u. Strand, E., 1906, *Abhandl. Senck. Naturf. Ges.*, 30 : 163.
 Locket, G.H. & Millidge, A.F., 1953, *British Spiders (London)*, II : 238-243.
 Savory, T.H., 1953, *The Spiders & Allied Orders. (London)* : 116.